

ドクターインタビュー

足立 準(あだち じゅん)先生

あだち皮膚科クリニック 院長

大阪市鶴見区JR放出駅からすぐ、通院に便利な「あだち皮膚科クリニック」は平成17年に開院されました。アトピー性皮膚炎、蕁麻疹などの皮膚アレルギーを専門とされる院長の足立先生にお話を伺いました。

——先生が皮膚科医を目指されたきっかけなどございますか？

代々医者の家系でしたが、父親は教師でした。戦争のせいもあって希望の医者にはなれなかったようです。そのような事情もあって、私が大阪医科大学にきました。しかし血が苦手で、初めは研究をしようと思っていました。皮膚科を選んだのは、ポリクリ(学生実習)で症状を目で診て、すぐに治せていいなと思って決めました。阪大病院での研修では、入院している重症感染症の患者さんや、悪性腫瘍の患者さんを診ながらがんばりました。その後、研究室で2年ほど、夜遅くまで研究していました。

それから、大阪府立羽曳野病院に勤務し、本格的に臨床皮膚科の勉強をしました。そこで、青木敏之先生の御指導があって、今があるようなものです。

——アトピー性皮膚炎の治療の変遷や成人型のアトピーについてお聞かせいただけますか。

「アトピー性皮膚炎は小さい頃だけ、大きくなったら治りますよ。」30年前はそう言われていたのですが、違うんですね。一旦治ったと思っても、大人になってまた出てくることも多くなりました。そして、若い先生は知らないと思いますが、1980年代のテレビ番組で放送された「ステロイド外用薬を塗れば塗るほど酷くなる」というステロイドバッシングにより、いわゆるステロイド忌避がぱっと広がりました。その頃、私は羽曳野病院でアトピーの治療をしていましたが、ステロイド忌避により治療法が混乱し、治療が遅れてしまったことによって、患者さんは、大変苦労されたと感じています。民間療法などにより、皮膚がズルズルに酷くなって、どうしようもない状態で来られる患者さんには、入院治療を行い、また、脱ステロイドにより感染症が多発し大変でした。

アトピー性皮膚炎の治療の際に、ステロイドを忌避し医療機関を受診しなくなったり、自宅に引きこもりすぎる患者さんが、重症化してしまうことが問題となっています。論文で報告していますが、アトピー性皮膚炎が重症化し、感染性心内膜炎を併発し、死亡に至った症例もあります。このようなことは減多にないことですが、治療を受けず放置している場合は、速やかに適切な治療を勧め、アトピーの症状をコントロールする必要があります。やはり酷くなってくると、症状が人目につくと汚いと言われたりして、引きこもりがちになったり、今は減ってきましたが、顔面の真赤な症状などは「脱ステ」の頃は多くて、治療が中断すると酷くなってしまうことがありました。

今は治療のガイドラインが確立され、アトピー性皮膚炎の治療混乱もかなりなくなってきましたが、まだステロイド使用に抵抗がある方がおられます。患者さんもネットでたくさん情報を持っているので、患者さんの主張も強くは否定できません。その場合、ステロイドをさっと使って皮疹を引かせて、プロトピックのようなステロイド以外のもので、再燃をおさえたいきましょうと治療法を説明して使用しています。

——診察室から見た最近の患者さんの症状や治療についてお聞かせください。

治療はガイドラインに沿って、特殊なことをしなくても、内服と外用薬を症状にあわせて行うのがベターだと思います。大学病院ではないので、重症な患者さんは少ないですが、本当に酷い時は、病院で徹底的に治して戻してもらおうという風になっています。なかなか検査をしてもその人の何が原因かは多種多様で、一つだけということはないので、



足立 準(あだち じゅん)先生のプロフィール

昭和56年3月 大阪医科大学医学部卒業
 昭和56年5月 大阪大学医学部皮膚科学教室で研修
 昭和60年9月 大阪府立羽曳野病院(現大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター)皮膚科勤務
 平成元年6月 大阪大学医学博士の学位取得
 平成8年4月 大阪大学医学部皮膚科専任講師
 平成10年4月 関西労災病院皮膚科部長
 平成17年5月 あだち皮膚科クリニック開設

所属学会 日本皮膚科学会(専門医)
 日本アレルギー学会
 日本皮膚アレルギー学会
 日本臨床皮膚科医会
 専門分野 アトピー性皮膚炎、蕁麻疹などの皮膚アレルギーについて。
 アトピー性皮膚炎、コリン性蕁麻疹の汗アレルギー
 成人アトピー性皮膚炎の細菌感染、特に溶連菌感染など。

治療法を確立するために病院での治療を勧めます。

あと、最近気になるのは、アトピー患者さんの職場の問題ですね。例えば、調理師さん、美容師さん、介護士さんなどの職業はどうしても水を使い手が濡れてしまう。特に介護士さんは入浴介助などもあるので、手足がなかなか治らない。濡らすこと自体が良くないです。刺激に弱いですからね。昔は配置転換してもらわないと治らないよって言えましたが、今は辞めさせられたりすることもあるようです。対策が難しいです。それとライフスタイル、昼夜逆転の生活はアトピー患者さんには良くないです。

また、体をきれいに洗わないと治らないと思って、ナイロントオルでゴシゴシ洗う方がおられます。汚れは、お湯に浸かるだけでかなり落ちるので、洗すぎると肌に必要なものまで落ちてしまいます。患者さんには、塗ったお薬を落とさないといけないと思っている人もいますので、薬が残っていてもいいので、出来るだけ肌に刺激を与えないよう、柔らかいタオルとか手で優しく洗ってください。ゴシゴシすってはだめですと言っています。

——患者さんへのメッセージなどお願いします。

アトピー性皮膚炎の原因を突き止めるのはなかなか大変です。砂場で小さなダイヤモンドを探すのと一緒で難しいです。まず、出ている症状を抑える治療をしましょう。山火事を放置しておく、と、どんどん広がります。まず初期消火が大事です。「塗らなかつたら治らない」という格言があって、いくら薬を出しても、塗ってもらわないとね。私たちでも、痒いときは一生懸命塗るけどちょっと良くなると忘れてしまったりしますが、出来るだけしっかり塗ってください。やはり痒みが主症状だから、なんとか少しでも痒みを抑えられたら、良くなっていきます。

——ありがとうございました。

優しくして穏やかな印象の足立先生。趣味は映画観賞、野球観戦とのことです。